

# 教官インタビュ― 社会学部助教授

# 加藤 哲郎氏

最近、政治や制度の大きな変化が身の回り  
で起きています。生活の中のさまざまなも  
事や不都合を解決する手段として、民主制や  
議会制はどう機能できるか。政治の腐敗とい  
うことが聞かれる今、改めて問う必要があり  
ます。加藤先生にお伺いしてみました。

## 社会主義の

## 今後のゆくえ

加藤 私はもともと一九一九年から四三年ま  
での社会主義運動組織、コミンテルンを研究  
してきました。政党(Party)というのは、  
もともと社会の部分(Part)ですが、コミンテ  
ルン＝世界共産党は、モスクワに本部をもち  
、国境を超えて世界全体に働きかけ統治しよう  
とする試みでした。しかし部分が全体になろ  
うとするわけですから、必ず他の部分との衝  
突は避けられません。政権にない各国支部＝  
各国共産党は力が弱く自律性がないので、ソ  
連共産党とモスクワ本部の指導と援助をおお  
がなければなりません。そこから幹部独裁が

生まれ、集権的で軍隊的な組織になりました。  
ロシア革命から生まれ、コミンテルンを通じ  
て世界に広められた、プロレタリア独裁、国  
有化万能主義、集権的計画経済、民主集中制  
などの観念が崩れつつある。それが一九八九  
年の社会主義の状況ですね。これらについて  
は、今度「社会主義と組織原理」(憲社)と  
いう本で歴史的に考察しました。そして、一  
九世紀に「空想的」とよばれた協同組合主義  
などの思想や、「修正主義」とよばれた社会  
民主主義の系譜が、復興してきています。生  
協運動もそのひとつですが、最近では消費ばか  
りでなく生産レベルでの協同、ワーカーズ、  
コレクティブがヨーロッパや日本で注目され  
ています。ハンガリーやポーランドで生まれ  
つつあるのは、社会民主主義の福祉国家への  
志向ですが、その社会民主主義のなかでも、  
一九三〇年代から長く政権にあるスウェーデ  
ン社会民主党や、ドイツのSPD(社会民主  
党)は、エコロジーやフェミニズムの問題提  
起をとりいれて、脱物質主義的に脱皮しよう  
としています。

ほん と ぴ あ 人民公社についてはどうですか？  
加藤 ロバート・オーウェン型の協同組合と  
ソ連のコルホーズや中国の人民公社は、思想  
的流れは異なります。人民公社は、国有化の  
前段階・低い段階と位置づけられ、個人農を  
国家主義的指令のもとに組織したものでした。  
七六年の天安門事件の時には、日本と中国の  
間のファックスでのつながりはほとんどなか  
ったのですが、その後の近代化・開放政策の  
なかで大都市のホテルなどに大量に入り、今  
回の天安門事件では世界からのファックス情  
報が、民主化運動の人々が世界世論を知る貴  
重なルートとなりました。民衆の世界的つな  
がり・ネットワークのインパクトは、非常に  
大きな意味を持っています。

## 議会政治のあり方

加藤 選挙された人たちが地元利益で動いた  
り、逆に基盤になるコミュニティの意思を代  
表していなかったり、議会制度に内在する矛  
盾がありますが、それを克服するには選挙と  
議会自体を革新的なものにしていくこと。議会  
の他にも民衆の意思を政策決定につなげるチ  
ャンネルを用意することが必要です。西ドイ  
ツの選挙は比例代表制ですが、「緑の党」の  
リストでは奇数番目が女性で、女性議員が一  
人多いか男女同数になる工夫がなされていま  
す。日本では小選挙区制による英米型二大政  
党制が理想化されがちですが、むしろ多様な  
政党・政治団体が国民の意思を比例代表する  
形の方が健全です。いろんな利害が反映され  
て調整が困難になるのは、大衆民主制ではさ

けられないことで、そこにヘゲモニーとリー  
ダーシップの重要性があるのです。政治学で  
ネオ・コーポラティズムという経済政策を政  
府と労使の代表で決定するシステムがありま  
すが、北欧やオーストリアではこうした議会  
外の機能的代表制度も発達しています。すべ  
ての決定が国家と議会に集中し、議会には政  
党だけという政治システムが、全体として疑  
問視されてきています。議会外の決定システ  
ムや国家にこだわらないローカル、グローバ  
ルな社会運動、政治体が重要になっていくと  
いうのが、私の認識です。日本でもアイヌ・  
琉球の人たちが在日朝鮮人、外国人労働者の  
人権を守るために、その人達の意向を反映す  
る特別のフォーラムが政治システムの中にあ  
っても、おかしくありません。

緑の党というのはthe Greenで、「党」と  
は名乗っていません。自分たちは社会運動で  
あり政党ではないと自己規定しています。単  
一争点であるエコロジーの生き方を求めて環  
境保全を追求していくと、保全財源の問題など  
が出てくるので議会にも関わりをもちます。  
しかし国家に政策転換を要求しながらも、「緑  
の銀行」など社会内部でボランティアな制度  
と運動を組織していきます。資本主義的工業  
化のゆきつまりのなかで、ヨーロッパでは  
「静かな革命」とよばれる物質的価値から脱  
物質的価値への価値観の変動がおこり、今年  
のEC議会選挙でも緑のグループが大躍進し  
ました。SPDが女性解放や環境保護を新綱  
領にとりいれるのも、その影響ですね。  
アメリカでは日本異質論が台頭して「日本

たたき」の根拠とされていますが、そのバイブルであるウォルフレン「日本の権力の謎」を読むと、日本の民主主義が選挙制度などでうまく機能していない、多数者民衆の意思が議会で反映されず少数者が抑圧されていると、それ自体は正当な指摘をしています。国際比較でいうと日本には物質的価値観が根強く、新しい社会運動もまだまだです。3%の消費税反対は参院選での変動をもたらしましたが、それなら流通機構にメスを入れる必要もあるし、価値観の変容にまでは至っていないと思います。現代日本の学生は、政治知識はもっているのですが、自分で問題を発見し、自分の頭で考え、これだと思つたらとことん発言しつづけるといった市民的能力の点では不満をおぼえます。企業社会に入るとますます大変ですから、四年間のモラトリアム期間に、そうした力を身につけてほしいですね。

加藤先生の話は明快で、大変ためになりました。「議会の他にも民衆の意思を政策決定につなげるチャンネルを用意することが必要だ」という意見には賛成です。グローバルな社会運動・政治体は現に存在していますが、まだ日本では活動があまり知られていないか、関心を持たれなかつたりします。価値観の変容を待つのか、それともその集団の価値観が変わるように仕向けるのか、が疑問点おそらく加藤先生も答えにくいと思われる。

一橋大学生協も全国大学生協連合会や流通機構や政府に政策・改革を促すチャンネルになるために、社会、社会問題(たとえばODA)を、皆さん、もっと研究しましょ。

### 書評

## 「邪推する、たのしみ」 井上章一著

福武書店

本書は、今年の2月に刊行された。そうい

った点では、書評の対象として取り上げるには、やや時期が遅いという気もしないではない。しかし、文庫と新書以外は、ほとんど古本屋さんからの購入に頼っている小生にとっては、本書はごく最近入手し、読了した一冊なのである。だいたい、一分一秒を争って読まねばならない本というのは、意外に少ないものである。しかし、時間が許せば読んでみるとよいという本はけっこうある。本書も、そのうちの一冊である。

著者は、現国際日本文化研究センター助教授で、建築史であるとか、建築意匠を専攻している若手の俊秀である。現在まで本書を含めて4冊の著書が公刊されている。刊行順に挙げれば、『靈樞車の誕生』・『つくられた桂離宮神話』・『アート・キツチ・ジャパネスク』、そして本書ということになる。そのいずれもが大きな反響を呼んだ。さて本書は、前三著とは異なつて、その時々に表示されたエッセイ・評論の編や対談の編の類を集めたものである。いずれも学者とは思えぬ平易で明快な文章で書かれており、頭を悩ますことなくスラスラと読める。もって範と

したいところである。

全体は三部に分かれている。「アートの収容所」と題された第一部は、彼がなぜ靈樞車だとか桂離宮だとかを研究対象に選んだのかという舞台裏の話になっている。あるいはいまままでに刊行された彼の著作の自註であると言つてもよいかもしれない。これらの文章に貫して流れているのは、建築を専攻しながら自分は建築物の美がよくわからない、という自己痛晦あるいは自己卑下である。そこから桂離宮はたして本当に美しいのか？誰が桂離宮は美しいという神話を作りあげたのか？その手口は？というような彼の研究テーマが浮かび上ってくるのである。楽しいのは、これらの文章にオチがついていることである。たとえ知識人がテッチあげた桂離宮神話、の脱神話化をはかろうとした彼は、そもそも桂離宮の存在すら知らないアーバギヤルからは、どのように見られたか。いずれにせよ第一部において示される、著者の屈折した感情表現は「インテリっぽい知識人」というセンで自分を演出したい人には、必ずや様々なヒントを提示するであらう。

「風俗の解放区」と題されているのが、第二

部である。ウォークマン・ファミコン・本、いずれも人を自閉的にさせると思われるのに、なぜ本を読むことだけが推奨され、他のものが批判の対象になるのか。平均初婚年齢の上昇・家族の解体・不倫の流行、これらの現象の裏には、どんな陰謀が隠されているのか。ここでは、このような事象に関して、独自の解釈が加えられていく。それ風の会話を楽しみたい時には、いい話のネタになるであらうことが、ここにはいくつもちりばめられている。

第三部には、対談2編が収められている。小生が、わざわざ本書を購入しようという気になったのも古本屋からだけど、実は、1部・2部のエッセイではなく、この対談の題材に魅かれたからである。そしてそれは、予想に違わず非常に面白い内容であった。本書中の自序と言つてよいだろう。そのうちの1つは、井上氏が現在の研究テーマにしている「美人論」について、氏は面食いだそうであるが、小生も女性の評価はほとんど顔である。もちろん美人が好きだ。女なんてものは、媚を売らなければ生きてはいけなし、美しくなければ媚を売る値打ちもない、と思つている。しかし良識ある市民は、そういうことは言つてはならないことになっている。顔の美醜で人を判断するなどもつてのほか、そんなやつは品性下劣・知能最低の陰田虫野郎だというような雰囲気は確固としてあるのである。それはなぜなのであろう。井上氏の美人論は、すでに「日本研究」へるめす」などという雑誌に幾編か発表されている。本書の対